

「英国少年  
愛読小説 鏡世界」

——「ジャバーウオックの歌」の翻訳からみる『アリス』受容の一〇〇年——

川戸道昭

(「明治のアリス」第二章抜粋)

「英国少年  
愛読小説 鏡世界」(以下、注釈「鏡世界」と表記)は、『英語世界』の「臨時大刊」と銘打たれた特集号に他の三編の小説とともに掲載されたもので、雑誌とはいえず、「世界奇談」という統一題が与えられ、一冊の書物のような体裁がとられている。出版の日付は、明治三四年六月二〇日とあり、天溪の「鏡世界」の連載が終了した明治三二年一二月から数えると、約一年半後の刊行であった。これを執筆した注釈者に関しては、単に「記者」として記されているだけで個人名は記されていない。藤井啓一著『日本英語雑誌史』によれば、『英語世界』(The English World)は、明治三〇年八月の創刊で(当時東京外国学校の学生であった高野異、森川乙猪、松浦与三松等の諸子が編集執筆していた)とある。注釈「鏡世界」の「記者」も、その三人の東京外国語学校の関係者のいずれかであったと思われる。もしかりに、最初の高野異ということになると、日本で最初の『アリス』の注釈者が、同時に、日本で最初のシャーロック・ホームズの単行本刊行者でもあったという、西洋文学の受容史上の特筆事項が二つ重なることになる。

ともあれ、どうしてこの注釈が天溪の「鏡世界」の影響のもとに刊行された作品であったことがわかるかという点、その確たる証拠は、注釈「鏡世界」とともにそこに収められた三編の小説である。それはライダー・ハガードの「英国青年白人国探検」、J・モリスの「壮絶快絶 日露戦争記」、アレクサンドル・デュマ(ペール)の「叙筆凄腕 巖窟王」という三編であるが、それらはすべて

『英語世界』「臨時大刊」の表紙



明治三十年九月二日 内務省特可

明治三十年八月四日第三種郵便物認可

当時の読書界に翻訳が出回っていた有名な作品ばかりであった。とりわけ、最後の二編に関しては、翻訳が掲載された雑誌や新聞の名前まで明らかにされている。たとえば、「日露戦争記」には（本書は嘗て日露戦争未来記と題して太陽に訳載）されたものとあるし、「巖窟王」には、（本書は現今萬朝報に巖窟王と題し訳載されつゝある原文なり）とある。もう一つの、「白人国探検」という作品もかつて『大宝窟』<sup>（18）</sup>という訳題で英語学者の宮井安吉が翻訳を手がけた作品であった。『鏡の国のアリス』の注釈の場合も、「英国少年  
愛読小説 鏡世界」というように、天溪の用いた邦題がそのまま用いられていることから明らかのように、『少年世界』に掲載された翻訳の評判に促されての出版であったとみてまちがいない。この「世界奇談」と銘打たれた『英語世界』の「臨時大刊」そのものが、当時の英語学習と翻訳文学の深いつながりを裏づける貴重な証拠資料ということができるのである。

英文テクス わたしが先ほど、天溪の「鏡世界」は、少年少女向けの読み物ばかりか、日本の近代文学全体の質を向上させる上の概要 上でなくてはならない作品であったといったのは、それがこの注釈「鏡世界」の刊行を促す最大の要因となつたということにもとづいている。それほど、本テクスの内容は時流を抜いた優れたものとなっている。そのことを示すにはとくに贅言を必要としないだろう。そこに掲載された内容で目につく特徴を一つ一つ書き出していくだけで、いかにそれが当時の水準を越えたものとなっているかおのずから明らかになってくる。

そうした特徴のなかでも、とくに顕著なものはないかという点、『鏡の国のアリス』の原書から抜粋した全文三二ページにもおよぶ英文テクストである。抜粋の箇所は、原書の一章から三章、それに六章と八章を加えた全部で五章。それが原文の章のおおりに六章は六章、八章は八章と表記され、原作との対応が可能なかたちで掲載されている。内容が把握できるように、各章の英文タイトルを記すと、次のようなものである。

- CHAPTER I *Alice Gets into the Looking-glass House.* (この章のみ小文字斜字体表記)  
CHAPTER II THE GARDEN OF LIVE FLOWERS.  
CHAPTER III LOOKIN-GLASS INSECTS.  
CHAPTER VI HUMPTY DUMPTY.  
CHAPTER VIII \* IT'S MY OWN INVENTION.\*

これを見てもわかるように、第一章のタイトルが原文では“LOOKING-GLASS HOUSE.”と改められているのをのぞくと、あとはすべて原文のとおりとなっている。各章の内容にはそれぞれ多少の省略がみられるが、だいたいは文頭か文末の一部の文章が省略されるという方法をとっているために、物語としては一連のまとまった内容を読むことができる。たとえば、第一章ではアリスが鏡世界に入る前の数ページは省略されているが、(この部屋はもう一方の部屋ほどきちんとしてないわ (They don't keep this room so tidy as the other)) というアリスのせりふ以降、(ジャバーウオックの歌) を含む全文が掲載されている。同じように第六章も、章末の(冬になつて野原が白くなるとき (In winter, when the



LABBERWOCKY  
"Thee's bright, and the slight loves  
Thee's gay and simple in the robes;  
His meekness wears the bowdler,  
And the meekness wears the bowdler."

「英国少年／愛読小説 鏡世界」(『英語世界』6巻18号)の口絵

fields are white)』というハンプティ・ダンプティの歌のトパーウオックの歌)もハンプティ・ダンプティの歌の解説もみな原文で読むことができるのだ。そればかりか、(ジャバーウオックの歌)の鏡文字になっているところまでが再現され、テニエルのジャバーウオックの像を含む七葉の絵とともに掲げてある。英語さえきちんと理解できれば、読者は欧米の人々と同じ立場に立つて作品と向き合える環境がこの「鏡世界」によって整えられることになったのである。

原文につけられ 問題はその英語をどこまできちんと読むことができるかということだが、そこで注目されるのが、テキステル的な確かな注釈 トに添えられた全文一二ページにおよぶ注釈である。それが実際に作品を理解する上での真の手助けとなっているのか、その中身を精査すれば注釈者の作品理解の程度も、当時の文学社会に対する貢献の度合いも自ずから明らかになってくる。なにはともあれ、その文例を冒頭の解説から抜き出してみるとこんなものである。

「Alice」といへる幼き女子あり。一日愛する猫児と余念なく戯れ居りしが、やがて室内の大鏡の中をのぞき之に映ずる影を見て『あれあそこにも一の室ありとみゆ、如何にかして此鏡より彼の室内に這入りて見たし』と独り言しつゝ在る間に、何時しか身は鏡の面を通りて彼方にと出でたり。其所は万事今迄 Alice の見たる処に反し、一として奇ならざるはなし。／此新世界は即ち鏡国にして、其君主白王、赤王を始め臣下たる騎者、砲台より卒（ふ）に至る迄皆備はり、一言以て曰へば、一大象棋世界に外ならず。以下掲ぐる処は Alice の此鏡国即ち象棋世界旅行紀なり。／Alice は ae'lis と発音すべし。』

天溪の「鏡世界」を読んでまったく理解できなかったのは、その鏡世界が同時にチェスの世界とも重ねられているという物語の背景である。それがここでははつきりと、〈此新世界は即ち鏡国にして〉、〈君主白王、赤王を始め臣下たる騎者、砲台より卒（ふ）に至る迄皆備〉わっている（一大象棋世界）であると説明されている。アリスは、その〈象棋世界〉に遊ぶ旅行者なのだ。それが巻頭の省略された部分の要約、すなわち、主人公のアリスが、鏡のなかに見いだした別世界へと入っていくと、そこは万事今までの世界とは異なる異次元の世界であったという要約とうまく結びつけられて、この前おきの文章全体が作品の流れを概説するガイドの役割を果たすものとなっている。読者の作品に対する理解は、この巻頭におかれた前おきがあるとないとでは、だいぶ違ってくる。いってみればこれは現在のキャロル作品に決まって付される解説のようなものである。

マザーグース それだけではない。この注釈にはもうひとつ、作品の背景を理解するうえで欠かせない重要な記述が見いだ紹介の第一号 される。それは第六章にてでくる謎の登場者ハンプティ・ダンプティに関するものである。いうまでもなく、その出典はマザーグースにある。最近鷲津名津江氏の著書等で有名になったマザーグース（イギリスにおける子どもたちのための伝承詩）が日本に知られるようになるのは意外に新しく、有名なハンプティ・ダンプティの詩なども大正八年になってはじめて翻訳がなされたというのがこれまでの通説であった。その年の三月に土岐善麿が出版した「Otogizuta（おとぎうた）」と銘打ったローマ字詩歌集のなかに「Karappono Kame」と題してその翻訳が載っているのが日本で最初の翻訳であると、鷲津氏の『マザーグースと日本人』<sup>(2)</sup>には記されている。その歌は〈Karappono Kame ga / Hei no neni nokkata, / Karappono Kame ga / Hei no ne kara okkotta〉という調子のもので、善麿は「割れてしまえば決して元に戻らない存在の卵を擬人化した」ハンプティ・ダンプ

ティ””という認識がまったくない当時の読み手のために、詩の意味が理解できるよう“からっぽの壺”に置き換えた”のだという。

注釈「鏡世界」は、このマザーグースの研究者の間で広く受け入れられている本邦初訳の時期を一気に二〇年近くもさかのぼらせる重要な文献ということができるのである。そのハンプティ・ダンプティの歌に付された紹介を以下に示してみると、次のようなものであった。

〈Humpty-Dumptyとは元来卵の別名にして、古くより小児の謎などに此名用ひらる。〉(W. Vietor 及び E. Dörr 二氏の合纂にかゝる *Englisches Lesebuch* によれば、最後の一行は *Cannot put Humpty-Dumpty together again.* とあり、その意味は『Humpty-Dumpty が塀の上に座て居て、ひどくおっこつた。王の軍勢皆な寄つて来ても(王の力を以てしても)、元の様につき合せることが出来ん。Humpty-Dumpty とはなアに? 答 卵。』但し、此所にては此話に合せんが為に変更したるなり。)

注目すべきは文章後半の二重カッコ内の記述である。明らかにこれはハンプティ・ダンプティの詩の翻訳である。善磨の訳と比べると、注釈という性質上、多少解説的なのが難点だが、その一方で、〈Humpty-Dumptyとは元来卵の別名〉ということを明示した上での訳だから、へからっぽの壺<sup>つぼ</sup>などというまわりくどい言い方をしないですむという利点もある。そして、なにより重要なのは、これが第六章のハンプティ・ダンプティの詩の原文につけられた注釈であったということである。注釈者は、解説の前段で、ハンプティ・ダンプティの詩の最後の行は、英語リーダー (*Englisches Lesebuch*) をみると、*“Cannot put Humpty-Dumpty together again.”* となっているが、ここでは物語の内容に合わせるために入れ替えられたとはつきり断っている。つまり、マザーグースの原詩四行を明らかにした上での翻訳であったというわけだ。これが、土岐善磨の〈本邦初訳〉を一八年もさかのぼらせる、目下のところ本邦最初のハンプティ・ダンプティの詩の翻訳ということになる。

言葉の支配者ハンプティ・ダンプティ 作品の背景を説明するのにこれだけ委曲をつくしているということは、ストーリーを構成する文章や言葉に対しては、言葉に對してもそれなりの周到な配慮がなされているにちがいない。そこで、この注釈「鏡世界」における次なる大きな注目点に目を転じてみよう。それは文中に使われている言葉や言い回しに付された詳細な解説である。注釈

者は、それについても、作品の背景説明と同じように的確な解説をほどこしているのか。そのことを確認するには、〈意味の専制君主<sup>(2)</sup>〉の異名をとるハンプティ・ダンプティの言葉を中心に検証していくのが最も効果的な方法であろう。彼が言葉の使用法をめぐってくりひろげるさまざまな珍説は、注釈のつけられる頻度も高く、そこに記されている日本文をつなぎ合わせていけば、ストーリーの概要をあらましましたどつていくことが可能となる。注釈者の力量をはかる上でも欠かせないところなので、例の〈非誕生日（注釈では〈不誕生日〉と表記）〉のプレゼントをめぐる珍説のあたりから、注釈者の解説を拾い集めて物語のあらましを組み立ててみることにしよう。

まず、ハンプティ・ダンプティの説くところによれば、誕生日の贈り物は一年に一度しかももらえないが、〈不誕生日〉のプレゼントは三六四日もらえることになる。それを証明するために、彼はわざわざアリスに三六五引く一の計算式を書かせる。それを受けとったハンプティ・ダンプティは、〈今善く見て居る暇が無いが何だか此運算で善いやうだ。して又之で見ると一年中に不誕生日の贈物を貰ふ日は三百六十四日ある訳だな。〉と得意顔にいう。アリスが、確かにそうだと答えると、ハンプティ・ダンプティは〈There's glory for you.〉と〈又候、奇怪なことを云ひ出〉した。この〈There's glory for you.〉という言葉は、ハンプティ・ダンプティの独自の言いまわしで、彼の説明によれば〈a nice knock-down argument.（人を云ひ伏せる議論）〉の意味だという。注釈はそこに解説を加えて〈故に前の There's... for you は、『そこでお前さんは一言も無からう』の義となる〉と、ハンプティ・ダンプティの言葉の意味をフォローしている。

面白いのはその先で、〈そんなに自分の思ひ通りな意味を言葉に与へることが出来るかは疑問だと〉アリスがいうと、彼は、〈夫は言葉と人間と何れが主人かと云ふ問題に過ぎない〉と反論する。言葉にはそれぞれ性格があつて、使いこなすのは相当むずかしいが、〈拙者は皆な自由につかふことが出来る〉と自信ありげに言い放った。言葉は使用人で、自分はそれを使いこなす（主人）なのだという。アリスが、一つの言葉にずいぶんたくさんの意味をもたせるのねとい返すと、彼は、使用人と主人の比喻を締めくくる結論として、いかにもナンセンス語の操り手に相応しい最後のひと言を口にする。いわく、〈そんなに沢山（a lot）の仕事させる時は拙者は何時でも余分の給料を払ふ。...土曜日の晩に言葉（aithem）が拙者の宅へ給料を請取りに集まるのをお前さんも来て御覧。〉と。まさに、意味の専制君主たるハンプティ・ダンプティの面目躍如といったところだろう。

もちろん、ここに示した文章において、注釈として取りあげられているのはカッコ内に示した文章のみで、それ以外は原文に

よって補ったものである。しかし、その補った文章はだいたいが注釈を必要としない平易な文章だから、当時の読者はほぼここに示したとおりのことを理解できたとみてまちがいない。ということは、少なくとも表面的なストーリーに関していえば、当時の読者は天溪の「鏡世界」の域を一気に飛び越えて現在の読者の置かれた立場にまで近づくことができたことになる。天溪の訳から一年半たつたかたないかのうちになしとげられた飛躍としては、まさに驚異的な飛躍とみていいものだろう。

ジャバーウ この注釈者は、よほど周到な読み手であったとみえ、例の〈カバン語〉を意味する〈portantean〉という言葉オックの歌 にも、〈旅行用大鞆。茲にては一語にて同時に二義を有するものゝ意〉と、実に適切な注釈を加えている。おそらくは東京外国語学校の関係者であったと推測されるこの無署名の記者の語学力は相当なものであったようだ。そこで是非とも注目してみたいのが、『鏡の国のアリス』の最大のハイライトともいえるべき〈ジャバーウオックの歌〉である。この注釈者は、歌の背後に広がる奥深い言語空間の一体どのあたりまで分け入っていくことができたのか。それをもって、彼のナンセンス文学理解の程度をうらなう試金石にしたいと思うのである。

物語の流れが概観できるように、先ほどのハンプティ・ダンプティの言葉に戻って、その続きから話すと、アリスは彼の〈言葉の主人〉という話を聞いて、あなたは言葉のことを説明するのが大変お上手なようだから〈ジャバーウオックの歌〉の意味を教えてくださいなどと切りだす。それを受けてハンプティ・ダンプティの歌の解説がはじまるという次第だが、先述したように、この英文テクストには、物語の流れを中断してしまうような省略はみられない。したがって、第一章の〈ジャバーウオックの歌〉も、第六章のハンプティ・ダンプティの〈カバン語〉の説明もすべて省略なしに掲げられている。例によってむずかしい語にはだいたい注釈が加えられているとなると、それをつなぎ合わせて一つの訳詩に仕立てることも不可能ではない。その方法でつなぎ合わせた〈ジャバーウオックの歌〉を以下に示してみると、だいたい次のようなものである。

〈我子よ Jaberwock を注意せよ。咬む処の齒と搔きつかむ爪を心付けよ。Jubjub 鳥を心せよ。frumious なる Bandersnatch を避くべし／彼(子)は手に vorpal 剣を掲げ、暫く manxome 敵を尋ねぬ。而して tumbum 樹の傍らに憩ひ、漸時沈思したり。<sup>(72)</sup>  
／uffish の念に沈み居ける時、此 Jaberwock は焔の燃ふる眼を以て tulgey の森中を whiffle し来り。其来るや burble したり／一二！一二！此 vorpal 剣、snickersnack と響き亘る。彼は遂に敵を殺しぬ。其首を取つて galumph してぞ帰りける／

オ、汝は Jaberwock を討ちたるか。我をして汝を抱かしめよ。我が beamish 見よ。嗚呼何たる frabjous なる日ぞ。Callan!  
Callan と喜び余りて父は chortle しぬ)

すぐにわかるようにこの詩には第一節と第七節(第一節のくり返し)が欠けている。注釈者が意味不明として解釈を放棄してしまっているために、ここに掲げることができなかつたのだ。参考までに、第一節に付された注釈の全文を掲げるとこんなふうになっている。〈Jaberwocky とは想像的の怪物なり。此一片の詩は全く無意味、而かも実際存在せざる文字多し。即ち云ふ処少なくて余は読者の想像に任せんとしたる妙案なり。其第一段は全然無意味なり。〉と。そして、第七節をみると、簡単に〈第七は第一と同じ〉としか記されていない。これでは、第一節、第七節は、空欄にしておくほかない。

しかし、それ以外の第二節から第六節までは、ここに掲げた文章をみてもわかるように、原文を忠実に反映した訳文がつけられている。面白いのは、訳文のところどころに原語が掲げられていて、それがこの注釈者の〈ジャバーウオックの歌〉に対する理解の程度を推し量る重要な鍵となっている点である。たとえば、〈我子よ Jaberwock を注意せよ〉ではじまる第二節を例にとると、ここに原語のままでてくるのは、Jaberwock ㄱ Jubjub 鳥、それに frumious ㄱ Bandersnatch を加えた四語である。これらの四語がなにを意味するのかを確かめるために、現在われわれが手にできる最も優れた訳例の一つである高橋康也氏の訳と比べてみると、その部分はこの訳になっている。すなわち、〈「わが子よ、ジャバーウオックに油断するなかれ! / 食らいつくその顎、かきむしるその爪! / ジャブジャブ鳥にも気を許してはならぬ、/ おどろしき バンダースナッチにはゆめ近寄るべからず!」〉と(傍線引用者)。

この高橋氏の訳文で傍線をほどこした部分は、一般の辞書などに掲載のないキャロルの造語で、上の注釈において英語で表記されている四語と完全に一致する。高橋氏はそれらの語をすべてキャロルの造語(Carrollian words)とした上で、言葉のなりたちや構成に関する詳しい解説を施している。つまり、「鏡世界」の注釈者は、その英語力にものをいわせて、辞書に記載のない〈カバン語〉や固有名詞をすべて拾い出し、それを原語のままここに掲げているということがわかるのである。

それは、三節から六節までのところも同様で、ここに原文のまま掲げられた一八語の単語のうち、いわゆるキャロル語に当たらないものは、わずかに whifle ㄱ snickersnack の二語にすぎない。しかし、その二語とても、決して普通の使い方をしている



語とはいえないもので、マーチン・ガードナーなどは、最初の「*Myth*」についてキャロル語ではないもののスラング的な意味に用いられているということで、わざわざ注釈を加えているほどである。そういう点からしても、「鏡世界」の注釈者は、ほぼ完全にキャロルの造語を識別して、ここに原文のまま列記しているとみてまちがいないのである。それらの原音表記のキャロル語が、注釈者の意図を越えて、思わぬ音律上の効果をあげているというのが、この注釈の見逃せない特徴の一つとなっている。

理解度を測る　では、注釈「鏡世界」の記者は、一体どこまでキャロル文学の本質を理解した上でこれらの語を選別しているのか。言い換えると、それらのキャロル語が、その解釈の仕方次第で、作品全体の解釈を大きく左右する重要な構成要素となっていることをどこまで理解していたのか。そうした理解の程度を客観的に測定するために、わたしはキャロル語の解釈を中心とする、四つの評価基準を設けてみた。これは、注釈「鏡世界」ばかりでなく、その後出版された『鏡の国のアリス』関係のすべての出版物にも適用可能なもので、明治以来のキャロル文学に対する理解の深まりを検証する際の一つの基準となしうるものである。その四段階の基準を以下に掲げると、第一に、キャロル語を含む（ジャバーウオックの歌）の原文にすべて目を通していかどうか、第二に、辞書に掲載のない語に注目しそれを他と識別しているかどうか、第三に、ハンブレイ・ダンプティの解説を手がかりにその歌の解釈にまで及んでいるかどうか、第四に、ハンブレイ・ダンプティの解説をめぐり、この上に第五段階として、以上のすべてを理解したうえで（ジャバーウオックの歌）をもとに、自らの言語実験へと飛躍していったかどうかという基準を設けることもできる。しかしそれは、創作ということを問題にする際に必要となる基準で、翻訳や注釈における理解の進展を確認するという当面の目的には、上の四段階でことは足りるだろう。

さてそれでは、この四段階の基準を注釈「鏡世界」に当てはめてみた場合どうなるか。まず、第一段階の原文すべてに目を通していかどうかという基準に関しては、原文の第一節から第七節までの詩句のすべてに注釈がつけられているところから判断して、一応クリアーしているものとみていいだろう。次の、辞書に掲載のないキャロル語を識別できているかどうかという点に関しては、先ほどの原語のまま掲げられた一八語のうち一六語までがキャロル語であったということから判断して、一応基準を満たしているものと考えていい。第一節の内容を（全然無意味なり）として翻訳を放棄してしまっているのは、わず

か四行の中に一一語もでてくるキャロル語をのぞくと、残るのはほとんど前置詞、冠詞、接続詞等の機能語ばかりで、日本語訳を組み立てようにも組み立てられなかったというのが実情だろう。別に、キャロル語が識別できないためにそうしたわけではない。

では、三番目の、ハンプティ・ダンプティの解説を手がかりに〈ジャバーウオックの歌〉の解釈にまで及んでいるかという点はどうかという点、この点に関しては、大いに疑問が残る。というのも、注釈者は、第六章におけるハンプティ・ダンプティの歌の解説に対し、〈Jaberwocky 本書IIの歌〉とひと言添えただけで、とくに〈カバン語〉の組み立てや意味にまで関心を向けていない。全部で一一語あるキャロル語に対するハンプティ・ダンプティの説明のどれ一つに言及することもなく、ただ〈sun-dial 日時計〉〈live mop 帚ほうきの化物〉というようにキャロル語を構成する通常語に注釈をつけることでお茶をにごしている。本来ならば、注釈者自身が、この説明をもとに、第一章にもどって〈ジャバーウオックの歌〉の解釈をしなければならなかったところだが、彼はそれをせずに、〈此一片の詩は全く無意味、而かも実際存在せざる文字多し〉としたまま、一切変更を加えることはなかった。要するに、注釈者は、その詩に含まれる〈無意味〉の意味には最後まで気がつかなかったのである。換言すると、彼の理解度は、レベル二の段階にとどまったということになる。

しかし、考えてみれば、この注釈が発表されたのは、明治三四（一九〇一）年というきわめて早い段階のことで、その時点で日本人の一英文学者が〈ナンセンス〉の背後に広がる広大な沃野の存在に気がつくというのはほとんど不可能に近いことであつたように思われる。そのころの欧米におけるキャロル文学を取り巻く状況を考えても、やつとG・K・ Chestertonの「ナンセンスの擁護」（一九〇一年刊）が発表されたかされないかという時期で、『アリス』を精神分析的視点に立つて解析したW・エンブソンの「牧童としての子供」（一九三五年刊）も、ナンセンスこそは「イギリス人の選ぶ「純粹詩」、<sup>(24)</sup>「数学的原語」、<sup>(25)</sup>「無言歌」である」と説くE・シュエールの「ナンセンス詩人としてのキャロルとエリオット」（一九五九年刊）も世に問われていなかった。ましてや、〈ジャバーウオックの歌〉の統合失調症的な解釈を試みた二〇世紀の鬼才、アントナン・アルトーの奇想なぞ知るよしもなかった。創作の分野においても、ハンプティ・ダンプティを公認の案内役としてジェイムズ・ジョイスが『フィンゲガンズ・ウェイク』の執筆に取りかかるのは、一九二〇年代も後半に入つてのことである。<sup>(26)</sup>

われわれは、キャロル作品における、この、作品が普及しはじめた時期と、作品にこめられた作者のメッセージが理解されは

じめた時期のズレに注目する必要がある。G・K・チェスタトンが、ナンセンスこそ（未来の文学だ）と看破してから実に半世紀もの時の経過をへてはじめて、キャロル作品のなかにこめられた（無意味）の意味が広く世間に認知されるにいたったのである。

当のヨーロッパにおいてさえそういう状況なのに、日本におけるキャロル作品の理解が明治三四年の段階で一足飛びに現在の理解の程度にまで飛躍していくことはとうてい考えられないことであつた。

楠山正雄の

日本の場合もそれ相応の時の経過をへる必要があつた。たとえば、注釈「鏡世界」の一九年後の大正九（一

『不思議の国』 九二〇）年に出版された楠山正雄の『不思議の国』をみても、キャロル文学に対する理解の程度は依然としてレベル二の段階にとどまっている。それは、楠山が、訳者の注記として（この詩のはじめの一節は、英語でもなんでもないと出たためです。お慰さみに、そこはそのまま出して置きます）と「鏡世界」とまったく同じ断り書きを付しているのを見ても明らかだ。彼は、その断り書きのあとで、鏡文字で記された原詩の第一節とそれをカタカナ表記に改めた次のような文を掲げている。すなわち（トウオズ ブリリグ、エンド ジ スライジ トーヴス／ヂッド ギヤ エンド ギムブル イン ジ ウェーブ）。「鏡世界」では、（全く無意味）としてなんの訳文も掲げていなかったところを、とにかく原音のままでも文字を掲げたことは進歩といえないこともない。しかし、キャロル語もそうでない語もすべてカタカナ表記としているために、それがキャロル語でそれが普通の語なのか見分けがつかないのは原作の趣旨からはずれている。やはり、「鏡世界」の第二節以降のように、両者を区別するためのなんらかの工夫が必要とされるところであつた。

それだけではない。楠山は、第一章でこのカタカナ表記のなぞめいた言葉を掲げたあとで、第五章にいたって、今度はハンブレイ・ダンブレイの解説につけた（訳者注）として、再度、第一節の詩句をとりあげているのである。それは全文を日本語に直したこんな調子のものである。（夕方でした。元気な穴熊の化物は／芝生でくるく／まはったり穴をほったりしてゐました。／帚鳥のお化はすつかり元気がありません。／家をはなれた青豚が啼いてゐました。）。先ほどの（この詩のはじめの一節は、英語でもなんでもないと出たためです）という断り書きといい、（帚鳥のお化）という訳語といい、楠山は、「鏡世界」の解説を参考にしてこれを書いたのではないかと思われる節がないでもない。しかし、問題はそれよりも訳文のほうだ。先ほどの原音表記とはうってかわって、ここにあるのはすべて普通の日本語を使った普通の日本語である。複数の語を組み合わせて一つの語にし

たいわゆる〈カバン語〉は一つも出てこない。その〈カバン語〉をどう受けとめ、どう日本語に表出するか、それこそが〈ジャバールウオックの歌〉の最大の注目点であるのに、楠山は、通常の言葉を用いて通常の翻訳に仕あげた。児童向けの翻訳であったということは斟酌する必要があるにしても、やはり、楠山にも〈ジャバールウオックの歌〉にこめられた〈無意味〉の意味がよく理解できていなかったということになる。換言すると、彼の理解の程度はレベル二の段階にとどまったということになる。

では、日本の翻訳文学界が、レベル二の段階から一步踏み出して、レベル三、レベル四へと歩を進めていくのは一体いつ頃のことであったのか。わたしの知るかぎり、それは太平洋戦争の終結から十数年も経過した、一九五九年のことであった。その年発表された岡田忠軒訳の『鏡の国のアリス』（角川文庫）には、〈ジャバールウオックの歌〉と題されたこんな訳が掲載されている。〈あぶりの時にトーヴしならか／まはるかの中に環動穿孔、／すべて哀弱ぼる鳥のむれ／やからのラースぞ咆嘯したる。〉

明らかに、これは六章のハンプティ・ダンプティの解説を受けた訳文である。たとえば、最初の一行に出てくる〈しならか（原文 stithy）〉という言葉をも、ハンプティ・ダンプティの解説で確かめると、〈しなやか（lithy）〉で〈ぬらぬらした（slimy）〉という語の〈カバン語〉だとある。岡田はそれを、双方の語を組み合わせて作った〈しならか〉という語に改めた。つまり、ハンプティ・ダンプティの解説を手がかりにその歌の解釈を示すという第三の基準を満たしていることになる。

一方、ハンプティ・ダンプティが解説していない第二節から第六節までの解釈はどうかというと、それについては、〈「ジャバールウオックにゆだんすな、子よ！／かみつくあごや、ひっかける爪！／ジャブジャブ鳥に目をくぼりつつ／バンダースナッチの怒りを避けよ！〉というように、注釈「鏡世界」の域をほとんど出ていない。要するに、〈ジャバールウオック〉（ジャブジャブ鳥）〈バンダースナッチ〉の部分英語からカタカナ表記に改められただけで、肝心な〈Furious〉というカバン語には、〈怒り〉という単なる通常語が当てられている。この第四の基準をクリアするには、高橋氏が試みているように、〈Fuming〉と〈Furious〉という語を組み合わせてつくった〈Furious〉というカバン語に〈おそろしき＋おどろおどろしき〉〈おどろしき〉という日本語の造語を当てる必要がある。それを、単に、〈怒り〉としただけでは、岡田も戦前の翻訳者のレベルから一步も出ていないということになる。この岡田の訳が発表された一九五九年という年は、マーチン・ガードナーの『注釈アリス』が世に送られるちょうど一年前のことで、日本人がそうした優れた注釈書の助けを借りずに独自に〈ジャバールウオックの歌〉の解釈を試みるということがいかにむずかしいかを物語る一つの好例といえるだろう。

とはいうものの、ハンプティ・ダンプティが解説をほどこしている第一節においては、岡田は「へしならか」なる合成語を創り出して、それを「Silly」というカバン語の訳に当てているのである。日本の『鏡の国のアリス』の翻訳は、この岡田訳の試みをもって、第三、第四の段階に突入したとみてまちがいない。それは、注釈「鏡世界」における原語表記のときから教えると共に五八年もの歳月が経過していたことになる。

なぜそれほどの日月を必要としたのかということについては繰り返す必要もないだろう。それは、ひと言でいえば、作品が普及しはじめた時期と、作品にこめられた作者のメッセージが理解されはじめた時期の時間的なズレに大きな原因があった。日本における『鏡の国のアリス』の紹介者たちは、その双方の間に横たわるギャップを西洋の作家や研究者が一つ一つ埋め合わせていくのを辛抱強くまつほかはなかったのである。

注釈「鏡世界」の　しかし、それにしても、注目しなければならないのはこの「鏡世界」という注釈が、六〇年近くの間、受容史上の位置　日本における唯一の『鏡の国のアリス』の基本文献となっていたという事実である。その間に『鏡の国

のアリス』の内容を知りたいと思っても、これ以外に原作者の意図をうかがう手段はなかったのである。とにかく、このテキストのおかげで「ジャバーウオックの歌」を含む原作の少なからぬ部分に目を通すことができるようになったことは大きい。しかも、そこには、「此新世界は即ち鏡国にして……一大象棋世界に外ならず」という作品全体を見渡せる解説が付けられ、ハンプティ・ダンプティに関するマザー・グースの原詩と訳文が載せられ、「カバン語」の定義が示され、「ジャバーウオックの歌」の翻訳まで掲載される、というように読者に対する配慮が行きとどいている。いかに当時の読者とはいえ、この注釈付きテキストを頼りに、そこにこめられた文学の本質を理解するのはそうむずかしいことではなかっただろう。少なくとも、戦前までの作品で、この注釈「鏡世界」のレベルを超える注釈・翻訳はまずみあたらない。原書をのぞくと、これが日本の読者が手にしうる唯一最良の『鏡の国のアリス』の基本文献であったといっても過言ではないのである。

さらに、注目すべきは、それが同時に、『鏡の国のアリス』の翻訳や翻案作品の不足を補う重要な基本文献でもあったということである。日本における『アリス』の受容は、一方に天溪や楠山らの児童を対象とする翻訳・翻案があり、一方にこの注釈「鏡世界」のように英学生を対象とする原文付きの注釈や訳注が存在するというように、二つの流れがたがいに補いあうかたちで出版されていった。そうした二つの流れが双方の欠落部分を補完しあいながら作品そのものの質が高められていったと考えるなら

ば、この注釈「鏡世界」は、天溪の「鏡世界」以降数十年間に出版された『鏡の国のアリス』の翻訳・翻案の欠を補う唯一無二の基本文献として、日本の『アリス』の受容史上忘れられないものがあったといえることができるのである。

## 注

- (15) 「英国少年／愛読小説 鏡世界」（無署名）『英語世界』六卷一八号（「英語世界臨時大刊 世界奇談」とある）。巻頭の目次に「Through the Looking-Glass by LEWIS CARROLL」とあり、これが現在確認されている日本で最初にキャロルの著者名・原作家名が明示された文献（天溪の「鏡世界」には著者名・原作家名ともに記載がない）。明治三四年七月に「訂正三版」が出ている。
- (16) 藤井啓一『日本英語雑誌史』（名著普及会、一九八二年一月）二八頁。
- (17) 川戸道昭・新井清司・榎原貴教編『日本におけるシャーロックホームズ』（ナタ出版センター、二〇〇一年九月）参照。
- (18) 宮井安吉抄訳『大宝窟』上、下篇（博文館、一八九四〔明治二七〕年五月）。
- (19) 土岐善麿『Otogiuta』（日本のローマ字社、一九一九〔大正八〕年三月）三六頁。
- (20) 鷺津名都江『マザーグースと日本人』（吉川弘文館、二〇〇一年一月）七八頁。キャロル作品の初期の翻訳にみられるマザーグースの訳については、高屋一成『アリス』のマザーグースの初期翻訳『MISCHMASCH』七号（日本ルイス・キャロル協会、二〇〇四年二月）に詳述されているが、そこにも『Otogiuta（おとぎうた）』以前のハンプティ・ダンプティの訳例は掲げられていない。
- (21) 高橋康也訳「ジャバーウオックの歌」（『別冊 現代詩手帳』二号）二五二頁。
- (22) 高橋訳、前掲文、二四八頁。
- (23) Martin Gardner, *The Annotated Alice*, Penguin Books, 1965, p. 196.
- (24) 下に掲げた論文の原題と出版年は以下の通り。G. K. Chesterton, "A Defence of Nonsense, in *The Defendant*, 1901. William Empson, "Alice in Wonderland: The Child as Swain, in *Some Versions of Pastoral*, 1935. E. Sewell, "Lewis Carroll and T. S. Eliot as Nonsense Poets, in *T. S. Eliot: A Symposium for his 70th Birthday*, 1959. 下に掲げた論文

文の翻訳はすべて前掲の『別冊 現代詩手帳』二号に掲載されている。E・シューエルの訳文は、柴田稔彦訳、前掲文、二〇二頁より引用。

- (25) 高橋訳、前掲文中の「註解(2)―アルトーにならいて」参照。
- (26) 大澤正佳「キャロルとジョイス」(『別冊 現代詩手帳』二号)一三〇〜三四頁参照。
- (27) G・K・チェスタートン／高橋康也訳「ノンセンスの擁護」(『別冊 現代詩手帳』二号)一九八〜二〇二頁参照。
- (28) 楠山正雄訳『不思議の国』世界少年文学名作集 第九卷(精華書院、「大正九」年三月)。第一部「アリスの夢」(『不思議の国のアリス』、第二部「鏡のうら」(『鏡の国のアリス』)を収録。奥付には「不思議の庭」とある。
- (29) 岡田忠軒『鏡の国のアリス』(角川文庫、一九五九年一〇月)一五頁。